彼らは何を言ってきたか - 図書館に関する出版・報道関係者の発言内容について -

伊藤民雄（慶應義塾大学大学院修士課程／実践女子大学） ito-tamio@jissen.ac.jp

I. はじめに

A. 研究の背景

出版不況を背景とし，出版・報道関係者によって繰り返される図書館批判は，2000 年前後，津野海太郎，林望の論考を起点として語られることが多い [1]。「自然発生した問題ではない。もっと先までに遡れるはずだ」という大手取次出身の教員との会話から着想を得て，図書館と出版の両業界を対象に，利害関係者たる出版・報道関係者が図書館に対して過去行った発言内容をまとめた既往文献の予備調査を行った。

その結果，2000 年以降は様々な角度から文献レビュー，文献リストが作成された [2]ことから，把握は容易であるが，1999 年以前を遡るには十分とは言えない状態にあることが分かった。

戦後から 1980 年までは，伊藤松彦 [3]と瀬島健二郎 [4]により，かなり詳細なリストが作成されている。問題は 1981 年から 1999 年までで，日本図書館研究会誌「図書館界」の 3 回のレビュー，200 号と 250 号で瀬島が行ったレビュー[5]は図書館関係者から眺め見た出版流通の観点で文献採取が行われたこと（出版関係者は 72 件中 3 件，33 件中 1 件），告知された 300 号（対象 1993～1999）は未掲載となり，さらに日本出版学会誌「出版研究」に掲載された古山悟由による 1990 年代出版関係雑誌文献目録 [6]には図書館の項目設定がなかった。以上から，図書館と出版は共に類縁領域にありながら，その重なる部分の発言内容の把握について，お互いに意識されなかった期間がある。そこに今回の研究の意義を見出した。

B. 本研究の目的

1960 年から 2017 年 9 月までの 57 年間に出版・報道関係者（作家，出版社／取次／書店関係者，ジャーナリスト，記者等）が発言した提言・意見を対象とした，①文献把握，②傾向分析と検索のための観点分類，③全体傾向の把握と遡り，④図書館側の対応確認，以上 4 点を課題とした。

C. 調査方法

1. 研究方法

文献研究を行う。紙資料（図書，雑誌，新聞）に掲載された OB や OG を含む出版・報道関係者の論文，エッセイ等の記述に，図書館（大学含む）に対して，すべし，必要である，いけない，望む等の主張，他者意見への賛同等が認められる文献を，既存の文献リストとレビューを活用した芋蔓式文献探索法と書棚でのブラウジングを中心とし，さらに 1954～1989 を対象とする『図書館・読書・出版界データベース集成』（金沢文圃閣）を利用して採取した。ネット発祥の文章であっても，紙資料に収録出版された時点の出版月で採取した。

2. 観点分類方法

発言内容を分類する観点は，大項目を 3 つ，中項目を 18 個とした（第 1 表）。大項目はⒶ批判的（第 1 表の中項目 A1～A6），Ⓑ過激で攻撃的（B1～B4），Ⓒ調和的（C1～C8）の 3 つである。

なお，文献中に出現する個人の全主張をカウントするので 1 文献（一人，1 件）1 観点ではない。

Ⅱ. 調査結果

A. 全体の発言件数

1960 年から 219 人，合計 488 の発言件数（発言例）を採取した（第 1 表）。但し，対談，鼎談，座談，シンポジウム等，複数の人数が発言する文献は，有効発言者で文献を分けカウントしている（実際の物理的な文献数は「438」である）。

B. 媒体及び個別タイトル

掲載対象資料 87 種（書籍は 1 種とカウント）から，採取媒体別の件数は，書籍（139 例），図書館業界誌（122 例），メディア雑誌（26 例），出版業界紙（23 例），出版業界誌（23 例）と続く。

【第 1 表】 出版・報道関係者の発言

年代	時代観	発言件数	観点（大項目） 注：文献1点に付き1点の観点ではなく複数の観点が存在する																	
			Ⓐ批判的（意見・抗議）						Ⓑ過激に攻撃的（要求）				Ⓒ調和的（要望・アドバイス）							
1960s	萌芽	8	2	2		2							1	2	2		3		1	1
1970s	協働	90	19		1	14		16				4	6	43	18	11	9	14	19	7
1980s	摩擦	37	18	1		2		6				2	1	9	3	6	4	11	5	
1990s	軋轢	45	20	4	8	10	1	5					8	12	10	4	12	6	2	3
2000s	確執	211	72	23	36	38	4	9	3	12	14	36	32	59	46	11	60	4	1	9
2010s	不和	97	41	10	17	17	3	2		11	1	3	18	34	15	7	28	2	1	10
総計		488	172	40	62	83	8	38	3	23	15	44	66	159	94	39	116	37	29	30
全488件に対する割合			35%	8%	13%	17%	2%	8%	1%	5%	3%	9%	14%	33%	19%	8%	24%	8%	6%	6%
全体に対する専有率			16%	4%	6%	8%	1%	4%	0%	2%	1%	4%	6%	15%	9%	4%	11%	3%	3%	3%
		観点（中項目）	A1 基準・方針・姿勢図書館行政への賛否	A2 貸出サービスの是非	A3 予約・複本購入への是非	A4 良書（学術書・専門書）購入期待	A5 文芸書/純文学書購入への賛否	A6 中小・地方出版物・見本市	B1 貸出実態調査要求	B2 貸出猶予期間設定の要求	B3 著作者・出版者への配慮	B4 著作権理解・公貸権導入の要求	C1 役割と機能分担（保存）	C2 連携・協力・共存共栄・地域密着	C3 人材・予算増要求	C4 知的自由への賛同・再販制度	C5 新たな図書館像創出・存在意義提示	C6 出版流通への理解	C7 図書館市場・ルート確立	C8 読書促進・共同読者調査

個別タイトルでは，1974 年から始まった出版と図書館の公的な議論の分科会の記録を含む『全国図書館大会記録』から 50 例，図書館員と出版業界関係者の往復書簡，作家の図書館エッセイ（主張ありのみ採取）が毎号連載されていた図書館業界誌「図書館の学校」から 46 例，「図書館雑誌」から 25 例，出版業界紙「新文化」から 23 例と続く。総合月刊誌は 15 例，文芸誌 14 例である。

C. 発言者

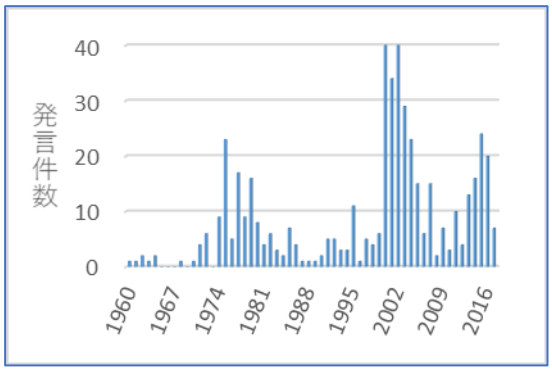
発言者の属性は，編集者延 137 人，著作家（作家等）延 135 人，出版社関係者（社長等）延 60 人の順となっている。発言者は，松本功（出版社社長）29 例，紀田順一郎（評論家，作家）16 例，小林一博（出版評論家）15 例，津野海太郎（編集者後大学教授）15 例，の順となっている。ここに挙げた 4 人は物言う図書館の良き理解者である。発言数最多の松本は，著作権及び専門書冷遇に対する図書館の姿勢には極めて批判的だが，「税金を使う図書館から税金を作る図書館へ」[7]の言葉のもと図書館のビジネス支援の確立に助力した。

1 文献（例）で多数の主張をしたのは楡周平で，8 つの観点から論じた [8]。次に多いのが 6 つの観点で述べた楡を含む 4 人（5 例）いる。

Ⅲ. 議論の内容の特徴

A. 全体的特徴

全 488 例をグラフにした結果，1975 年と 2000 年をピークとする 2 つの山（時期），2010 年以降に別の山が認められる（第 1 図）。第 1 期と第 2 期には，議論の高まりにより，日本書籍出版協会が，1976 年に「図書館への出版流通に関する調査」を，2003 年に「公立図書館貸出実態調査」（日本図書館協会も主体者）を行った。



【第 1 図】 発言件数の推移

1960 年代は，巖谷大四（書評紙編集長）の発言「図書館そのものに，何を望むことは今思いつかない」[9]が象徴するように多くはないが，出版業界の重鎮・布川角左衛門は「風通しをよくし，相通ずる綜合的な構想や対策を立てるべき」[10]であると発言し，以後 1970 年代に 5 回に渡り行った提言は，両者の橋渡しに大きな役割を果たした。

1971 年に日本書籍出版協会図書館連絡委員

会の設立を契機に 1970 年代は疎遠であった図書館と出版両業界が協働・連携した（C2）時代となった。出版流通の改善により発言件数が減少したものもある（A6,C6,C7）。発言者が異口同音に「図書館は変わった」と書いているのが印象的である。一方，図書館活動方針（A1）と人材・予算増（C3）はどの時代も一定数認められ，不況時に良書購入への期待（A4）の発言が増える傾向がある。

1990 年代から徐々に，貸出（A2）や予約・複本購入（A3）への発言が増え，2000 年代に入ってから権利侵害への異議と賠償補償要求の論議（B3,B4）が加わり，2010 年代以降は，貸出猶予期間設定（B2）に議論の中心が遷移した。

B. 発言者

1960～1970 年代にかけては，日本書籍出版協会関係者，布川，小林，紀田，清水英夫（法学者，編集者，後に大学教員）等，発言者が固定された傾向がある（98 例中 12 人で 43 例・約 44%）が，それ以降は多種多様な関係者が，百家争鳴の議論を繰り広げた。特に 2000 年前後（第 2 期）の件数激増は，出版・報道関係者が図書館に発言可能な場として，雑誌「季刊本とコンピュータ」（1997-2005）と「図書館の学校」（2000-2007）が存在した（両者で 59 例。全体の約 12%）ことも一要因であるが，第 3 期にその種の雑誌はない。

C. 強い表現が使用された批判例

本研究の原点となった 2000 年以前の強い批判の遡りはどこまで可能なのか。「無料貸本屋」の様な揶揄的表現も併せて示すことにする。1995 年には，相互貸借による資料利用と廃棄本持ち帰りコーナーを見た青木正美（古書店主）が商業誌『新潮 45』に図書館のことを「官営の「無料貸本屋」」[11]と書き，賑わう町の図書館を見て，菊地敬一（書店主）は「本の貸し出しもする町の無料休憩所」[12]と選書ツールに書いた。その前年には，藤脇邦夫（出版社営業）が「図書館は出版産業の敵だ」[13]と直接的表現を用い，さらに 1984 年に遡ると，立花隆（ジャーナリスト）が，図書館を「公営[の]無料の大食堂」と例え，「市民の読書生活において，図書館が中心的役割を果たす[ことには]大反対である」[14]と強く批判した。

1970 年代まで遡ると，『市民の図書館』を範とする図書館活動を傍観し，特に選書に対し，青木春雄（出版社会長）が，1974 年に「マスプロ出版物が独占し，図書館までもが限られた予算の中から優先して購入した…大衆追随主義は結果的にマイナス効果を生む」[15]と書き，西谷能雄（出版社社長）も 1976 年に「地域住民の要求に無原則にこたえていこうとすれば…きわめて画一的な安易な品ぞろえで終始し…地域住民追随主義，迎合主義以外の何ものでもない」[16]と苦言を呈している。

2000 年代と異なり，これらの強い批判が表面化しなかった理由は，掲載誌が「図書館雑誌」ではなく，またネットによる流布もなかった。そして，市民図書館活動が展開中だったからと推測される。

D. 議論の中身

多種多様な議論に，(1)二項対立，(2)反権力，のような図書館への複雑な感情が認められる。

(1) 二項対立例。高橋元理（書店主）は，図書館が顧客であるか否かによって「大事なお得意先である…が…同時に大きな脅威[である]」[17]と発言し，重松清（作家）は，経済行動が伴うか否かで「図書館で借りて，あなたの本を読む。一見，作家を喜ばせる言葉のように思えても，こっちの本音は…」[18]と述べた。作品を資料として見ると，読まれれば嬉しい表現者として作家を見がちだが，作品には商品，作家には専業作家という一面もあることを認識することが大切である。

(2)反権力例。佐々木繁が指摘したように，出版業界関係者には，「お上によって作られた役所の一種…図書館の“館“は食偏を取った”官”に通ずる」[19]，を始めとした錯覚・偏見や警戒感，公務員や役所への嫌悪を示すものが 2000 年代まで見られたが，公務員については，2010 年代にはほぼ批判が見られなくなった。

E. 図書館側の対応方法

商業誌に掲載された批判 7 例に対し，同一誌で抗議を行ったのは，三田誠広[20]に対する前田章夫[21]のみである。作家の発言は，社会的に注目され影響度が高い[22]ので，読者・聴衆に双方の考えを伝える場が必要である。

Ⅳ．まとめ

以上から次のようにまとめる。

(1) 1960 年から現在まで，出版・報道関係者の発言が活発な時期は 3 回認められる。(2) 時代と共に発言内容の中心が遷移していくものもあれば，どの時代も共通に見られる発言もある。(3) 2000 年代の批判と同様の強い表現を用いた批判内容は 1970 年代から認められる。(4)双方の相互理解，読者に判断を委ねる場が必要である。

---

1 起点を，津野海太郎．市民図書館という理想のゆくえ．図書館雑誌．1998, vol. 92, no. 5, 336-337.とするか，林望．図書館は「無料貸本屋」か:ベストセラーの「ただ読み機関」では本末転倒だ．文藝春秋．2000, vol. 78, no. 15, p. 294-302.とするか，或いは他とするかは各人の判断による。

2 主な文献レビューとして，湯浅俊彦．出版流通と図書館 ：21 世紀最初の 10 年間．図書館界．2010, vol. 61, no. 5, p. 519-527.；田井郁久雄．資料提供サービス．図書館界．2010, vol. 61, no. 5, p. 458-468.；西澤敏明．“出版界との軋轢，そして共存”．図書館の敵．西澤敏明．2009, p. 128-159.；安井一徳．"第 1 章「無料貸本屋」論"．田村俊作，小川俊彦．公共図書館の論点整理．勁草書房．2008, p. 1-34.（図書館の現場，7).；文献リストとして，片野裕嗣．「新刊貸出猶予」「複本購入」問題関係文献リスト[簡易版]．みんなの図書館，2016, no. 465, p. 19-22.；薬袋秀樹．複本限定・貸出猶予関係主要文献リスト 2016 年9月 15 日現在．http://toshokanron.jugem.jp/?eid=10.（2017-08-24，入手）.

3 伊藤松彦．"図書館と出版"に関する文献覚書．現代の図書館．1974, vol. 12, no. 2, p. 83-86.

4 瀬島健二郎．"図書館と出版に関する文献目録（稿）"．日本図書館協会出版流通対策委員会編．図書館と出版流通に関する資料集．日本図書館協会．1981, p. 270-286.

5 瀬島健二郎．出版流通と図書館．図書館界．1985, vol. 36, no. 5, p. 357-362；瀬島健二郎．出版流通と図書館．図書館界．1993, vol. 45, no. 1, p. 110-115.

6 古山悟由．90 年代・出版関係雑誌文献目録(稿)(1)．出版研究．2001, no. 32, p. 45-92；(2)．2002, no. 33, p. 49-105；(3)．2003, no. 34, p. 123-198.

7 松本功．税金を使う図書館から税金を作る図書館へ．ひつじ書房，2002, p. 4.

8 シンポジウム進化する図書館－著作権を中心とする課題と将来像を考える．全国図書館大会記録．2003, no. 88, p. 371-384.

9 巖谷大四．これからの図書館のために．図書館雑誌．1960, vol. 54, no. 12, p. 7-8.

10 布川角左衛門．出版界の諸事情と図書館界．図書館雑誌．1968, vol. 62, no. 3, p. 90-94.

11 青木正美．『古本買いません』時代の古本屋マル秘商法．新潮 45．1995, vol. 14, no. 12, p. 106-115.

12 菊地敬一．書店と図書館の共存は可能か？．週刊新刊全点案内．1995-05-08．頁不明.

13 藤脇邦夫．"図書館は出版産業の敵だ"．出版幻想論．太田出版．1994, p. 81-83.

14 立花隆．“まずは書店めぐりから”．「知」のソフトウェア．1984，講談社，p. 91.（講談社現代新書，722).

15 青木春雄．専門出版社と図書館．出版ニュース．1974, no. 990, p. 6-10.

16 西谷能雄．出版界と図書館:出版社の立場から．京浜文化．1976, vol. 17, no. 3, p. 1-7.

17 高橋元理．書店の立場から．平成 14 年度（第 88 回）全国図書館大会記録．日本図書館協会．2003, no. 88, p. 341-344.

18 重松清．「図書館で人気」の私の本：笑顔で応える作者の心中は．毎日夫人．2003-12, p. 21.

19 佐々木繁．図書館と出版界．図書館雑誌．1974, vol. 68, no. 4, p. 125-128.

20 三田誠広．図書館が侵す作家の権利:複本問題と公共貸与権を考える．論座．2002, no. 91, p. 184-191.

21 前田章夫．三田誠広氏の批判に答えて:図書館と作家・出版社は共存する義務がある．論座．2003, no. 92. p. 200-207.

22 紀田順一郎．"図書館軽視の背景 ： 日本は図書館思想の発展途上国"．読書三到．松籟社，2005, p. 57-63.